

会長賞

「背中」

H・K (三十八歳)

受験した大学すべてに不合格。「もう大学には行かない」。二十年前、僕は、家族と僕自身にそう言っていた。

そんな頃、父は近くのダムへ、ワカサギ釣りに僕を連れて行った。父なりの思いがあったのだろうが、特別な誘い文句はなかった。

釣りをしながら、背中合わせにいた父がふと、「お前は、福祉の仕事が合っていると思う。」と言った。

僕は返事をしなかった。心に響く言葉でもなかったし、父にとっても何気ない言葉だったと思う。

二十年后、僕は福祉の仕事をしている。たぶん、この父の言葉に導かれたわけではない。父も覚えていないだろう。でも、我が子と出会ってから、なんとなく気づいてきた。「あー、ちゃんと僕のことをわかっていた。僕の背中を見てくれていた」のだと。大人になろうとする僕への、父からの最大のプレゼントだったように思う。

目の前にいる愛しい背中を見ながら、父の思いを重ねる。



家庭の日賞

「お気に入りの風景」

M・I (四十九歳)

何十年前の話、私の父は、大工の仕事をしていました。ある日、父が建てている家の棟上げに付いて行きました。沢山の木から成る骨組みの家を見上げて感動したと同時に、父を大きく誇らしく思えたものです。

父は、休日でも変わらず大工仕事をしていました。帽子をかぶり、耳に鉛筆を掛け、腰には大工道具が入る袋をさげています。当時、世の中のお父さんは何でも作って何でも直せるものだと思っていました。耳に鉛筆・木の香りは、私のお気に入りの風景と香りでもありました。

日曜大工の合間に母が父を呼びます。家族でのティータイムは格別のものでした。

優しい父、ニコニコ笑ってお茶を出す母、家族の中心で愛される弟。幸せな時間でした。

私の家からは穴道湖が観えました。穴道湖を観ると、そんな昔を思い出し心とみます。

昔も今も変わらない穴道湖の景色が大好きです。

「大社合宿」

大谷 敏江（六十二歳）

結婚して、三人の子宝を授かり、結婚三十七年を迎えた今、四人の孫に恵まれました。

昨年の夏休み。埼玉の孫が二人で大社へやってきました。四年と二年の男の子。来てすぐゲームのやりすぎで、じいじに叱られ、ゲームなしの十日間を過ごすことになりました。

ゲームはなくても大社にはやる事が沢山ありまして、魚釣り・海水浴・ボートこぎ・ラジオ体操・町の探検はじいじの出番。帰りたくない二人にじいじが出動！「帰るぞ！」の一言に「ハンターじいじがやってきたあー。にげろー。」

夏休みの宿題・寝る前の読み聞かせは、ばあばの出番。遊び、勉強、お手伝い。どの場面も楽しく嬉しくて幸せでたまらない。

ある時、「ばあばのお口はいつもえのお口だね。」と言われ、?????・そうか！わかったえのお口。いつもばあばは笑っているねと言う事だったのね。

じいじと孫と私の時間。幸せでちゃんとお顔に出ていたんだね。





しまニッコ賞

「なにごともしよきにとれ」

S・S (七十七歳)

五歳で母を亡くしたあなたが、母のいない寂しさや、つらさを訴えると、あなたの父はよく言ったそうですね。「なにごともしよきにとれ。お前には四人も兄がいる。ない人もいるんだよ。貧乏はしかたがない。でも心も貧乏になっちゃいけない。心の貧乏とは、恨み、つらみ、ひがみ、うらやみ、盗み、自慢、高慢、たかり、の八つだ」

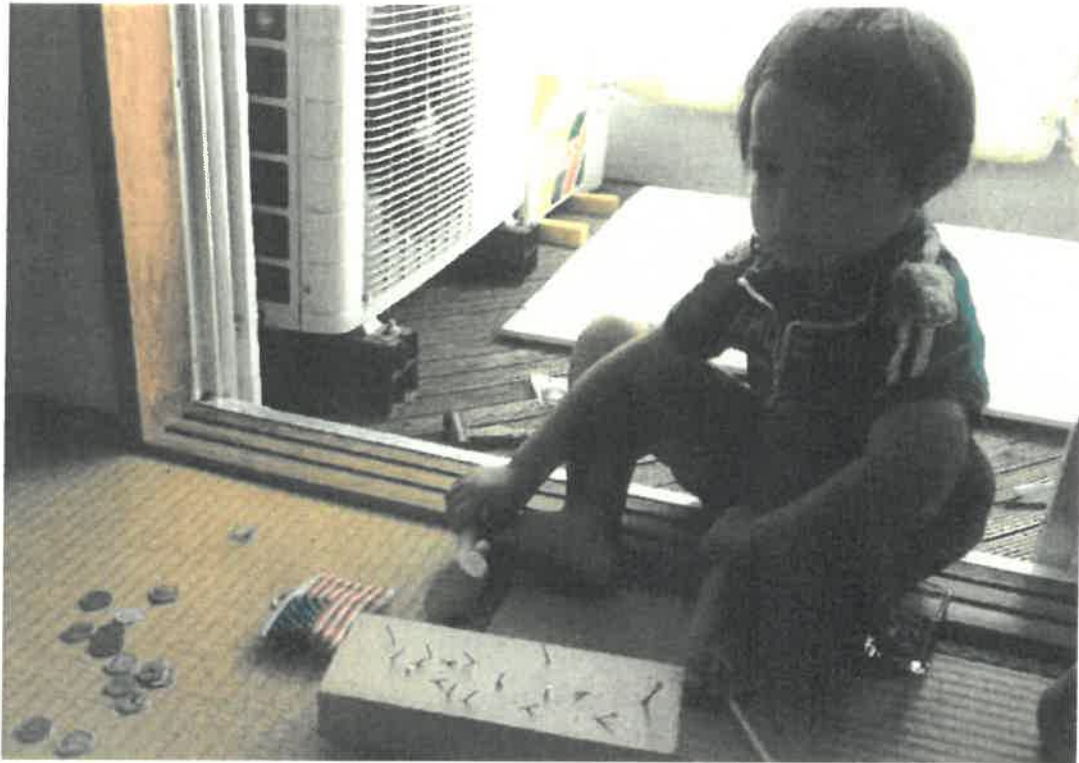
お母さん、僕たち六人の子供も、同じ言葉を、あなたの口からよく聞いて育ちました。しかし、自分の親がうつとうしい青春時代、あなたの言葉は、現実逃避の自己満足、自己陶醉。敗北主義だ！、と激しく攻撃したことがありますね。

お母さん、見えなかったものが、今、よく見えます。

―なにごともしよきにとって 生きてきた 悲しさ

―なにごともしよきにとって 生きてきた 豊かさ

拒否し否定するのではなく、受け取り肯定し活かしていく。それがまた相手の人を豊かにするのですね。



しまニッコ賞

「何をしてても可愛いよね」

林 一茂 (四十二歳)

我が家の長男「航太郎」は、三才九ヶ月。

イタズラ盛り？ どころか 真っ盛りなのだ！

とある休日・・・(あの子はどこ行ったのかなあ？)

「おーい、航太郎！どこだ？」

「げげっ！」私は目を疑った。

なんと、使う予定だった木の板が、クギだらけなのだから・・・

しかも、誕生日プレゼントに買ってあげたばかりの『木のトンカチ』までもボコボコである。

私は正直ショックであったが・・・

木の板に打ちつけられた無数のクギを見て、航太郎の一生懸命さが伝わってきて、とても怒る気にはならなかった。

こんな航太郎にも弟ができて、今では立派な「お兄ちゃん」だ。可愛い時もあれば、頭にくる時もあるが・・・全てひっくるめて日々の成長が楽しみだ。

家族っていいなあ



しまニッコ賞

「土のぬくもり」

西 基宣 (八十三歳)

農業と言っても、公務の合間ということでは本格的な農業とは程遠く、少しある自作田を耕作するにも、田起こしは人の手間をあてにして、田植えも稲刈りも、つい最近まで家族総出の手作業でした。国道沿いの田で稲苗の手植えをしているところを珍しがり、観光バスを止めてお客さんが写真を撮られたことも遠い話ではありません。日曜日を待って、二世代四人に孫三人の手を揃え、初夏には苗配り、線引き、田植え、秋には稲刈り、稲架作り、稲かけ、脱穀に励みました。能率の良くない仕事でしたが、畦に腰を下ろしてお茶を飲み、孫の話に笑うなどした心楽しい一時が思い出されます。農業機械で手際よく作業を片付けられる同郷の人々に、わが家の様子を羨ましがられたこともあります。中学校の孫が稲架の上と下で稲かけをしている姿は、もう写真でしか見られなくなりました。孫たちもやがて社会人。農作業で結ばれた家族の絆が写真を通して今、ほのほのと浮かんできます。



入賞

「できないこと」

M・Y (三十九歳)

「こっちゃんね、まだ三歳だから上手にできないことがいっぱいあるの。まだ三歳で小さいから仕方ないんだよ。そんな小さい子に大きな声で怒ったらいけないと思う。」

第三子である長女が三歳だった時、本人から言われました。更に目に涙を浮かべて、

「こっちゃんね、おかあちゃんに大きい声で怒られると悲しいの。おかあちゃんのこと大好きだから。」

プレゼンテーション能力にただ驚き、関心したのを覚えていますが、でも、遊びながらごはん食べるのを許容するわけにはいかないんですよ。母としては。

そんな娘もこの春、小学校に入学です。

「できること」はどんどん増えて行っています。それでもまだ五歳。「まだ三歳なんだから」という気持ちを持って娘と向き合っていきたいと思います。



入賞

「帰り道」

K・I (五十八歳)

三女が幼稚園に通い始めた頃。三人目までの子と違って毎朝登園のたびに私から離れてくれません。振り払っていいこうにもすごい力で掴ります。しばらく一緒にいてはと言ってくださる先生。困りますといわれる先生。板挟み……。他の子は離れられるのに……。私は辛い気持ちで一杯になりました。そんな日の続いた幼稚園からの帰り道、朝のことなどすっかり忘れたように手をつなぎ元気に歩く娘。その時の私にはその様子が腹立たしく思えました。どうして朝になるとできないの……。思わず娘の手を「ぎゅっ」と強く握ってしまいました。その時です。娘が私に言いました。「お母さん、いつも一緒にいてくれてありがとう。……ハッとしました。娘も頑張っていたんだ……。」「申し訳なかったな……」。娘はじきに幼稚園にも慣れました。二十九歳になった娘に話しても娘は覚えてないよといえます。でも、私にはその時の情景まで今もありありと浮かんできます。



入賞

「農作業」

T・A (五十歳)

小学校低学年の頃は我が家も耕運機で田を耕していたが、いつの日か乗用のトラクターに変わった。それでも米作りには沢山の手が掛かり両親、祖母の働く姿は周りの田んぼや山の景色とともに今も容易に思い出される。小学校高学年の頃は父に代わり私がトラクターで田おこし、代掻きを任せられた。父がトラクターと一緒に乗って操作方法やコツを教えてくださいました。穏やかな日のトラクター作業は気持ちいいのだが、まだ雪が舞う寒い日もあったし、子供なので、「遊びたい」「テレビを観に帰りたい」と思う日もあった。『この田が終わったら帰ってもいい?』近くで別な作業をしている両親に訴えることが度々あった。両親には貴重な労働力だっただろうが、子供のことで諦めて、ひとつふたつ条件を出して解放してくれていた。あれから四十年近く経ち、両親の代わりに米作りの真似ごとをする。誰に教えて貰った訳でもない。米作りの作業手順は、あの頃の両親との思い出なのだ。

「娘へ」

恩田 則子 (五十二歳)

まだ長女が幼稚園にあがる前でした。

昼間は二歳年下の長男と三人。私がペーパードライバーで遠くへ遊びに連れて行くのもままならず、歩いて十分くらいの公園に度々遊びに行きました。

公園と言っても遊具はすべり台とシーソーだけ。おにぎりとおかずが一品くらいの簡単なお弁当を作ってお茶も準備して持って行き、ひとしきり遊んだ後ベンチに座ってのお弁当タイム。

私が車を運転できればもっと大きな公園や色々な所に連れて行ってあげられたのになど、なんだか申し訳ない気持ちでした。

成人した娘はその時の事を覚えていて、子供心に遠足気分でも楽しくて、将来子供ができたら自分もそうしたいと思っていると書いてくれました。

悩んだりする事も多かった育児でしたが、娘のその言葉でなんだか報われたようでした。嬉しくて…。

私の元に生まれて来てくれて本当にありがとう。





入賞

「天神さんの境内にて」

K・O (五十五歳)

小さい頃、天神さんの日は家族でお詣りに出かけた。境内はところ狭しと屋台が並び、参拝の人でいっぱいだった。鳥居を潜り、左手には「お化け屋敷」。ここの前は、父と一緒にでなければ怖くて通ることができなかった。

天神さんは、子どもの頃、もつとずっと大きかった。三角野球のグラウンドであり、鬼ごっこ、缶蹴りにもってこいの場所でもあった。しかし、祭りの夜になると今でも何倍にも大きくなる。

天神さんの横の通りには洋食屋さんがあり、その日には、祖母がハンバーグステーキを僕たち兄弟にごちそうしてくれた。

僕たち兄弟が受験の時には、両親も祖母も、天神さんをお願いをしてきた。たぶん、父や叔父のときにもそうだったと思う。今は私が、子どものためにお詣りをするようになった。

家も街の景色も変わったが、祖母から父、母へ、そして自分から子どもたちへと、この場所では同じ気持ちが伝わっていく。

入賞

「雪と青空と私」

J・O (四十一歳)



幼い私は、毎日塗料の粉だらけで家に帰ってくる父を見て不思議に思っていました。家に戻った父に抱っこをねだっても、すぐにお風呂に行ってしまう抱っこはしてもらえず。お風呂上がりの父は、いつも難しい顔で晩酌をしていて、怖い顔だなと思いつつ寝ていました。

少し大きくなり、車に塗料を吹き付ける仕事中の父を見たとき、とてもカッコいいと思い、その頃から、家のお手伝いで父の作業服をたたむのが夢になりました。

写真の子はその頃の私。初めてスキーで滑った日に父が撮ってくれた一枚です。雪遊びで濡れた手袋が冷たくて大泣きをした後に、手袋がダメなら…と父が私を抱えて一緒に滑ってくれたそうです。そして私は素手のまま一人滑りに挑戦！父はいつも楽しそうに私に滑り方を教えてくれました。

私はいま親になり、子どもと一緒に雪遊びやスキーを楽しんでいます。そして、雪山で青空を見ると、いつも一生懸命で怖くて優しい父の姿を思い出します。



入賞

「島の夕暮れ」

青山 由紀 (四十二歳)

半世紀ほど昔のことですが、父の初めての赴任地は隠岐の島の小学校でした。その後しばらくして結婚し上の兄が生まれ、家族は那久という夕日の美しい土地で生活を送りました。本土から来て慣れない島暮らしをしている家族を島の方々は温かく迎え入れ、困ったときは親身になり、とてもよくしてくださったそうです。二年前私が隠岐に赴任することになり、一緒にこの地を訪れてお世話になった方々のお墓参りをしました。当時、両親は車のない生活だったので、滅多に西郷の町まで行く機会はありませんでした。日々の暮らしの中の楽しみのひとつは、きっとこの夕日を眺めることだったと思います。夕暮れ時、兄をおぶって歩く母がいるような、ここを訪れるといつもそんな気がします。私も三年前から隠岐の地で働き、夕暮れを眺めるため時々那久を訪れます。両親の始まりの場所、家族の原点である隠岐の島。時を超えて今も変わらぬ美しい風景と温かな人情の島の夕暮れです。



入賞

「夕焼小焼」

田中 静龍 (七十八歳)

浜田湾の西の長浜丘陵地の斜面は、段々畑になっていて大豆畑が百万町と歌われた。戦後は食糧の増産で麦やさつまいも、そして桑を栽培して養蚕業も盛んであった。

父は、農家の八男で村を離れて働いていたが、土、日曜日には本家の農業を手伝う為に親子五人で本家に帰って手伝いをした。

子供のからだに合うように作られた背負子を背おうてひと一人が歩ける急坂の小径を何回も登り降りした。

甘藷の収穫時は、段畑の途中で海を見ながら中休みをした。その様なとき母が教えてくれた唄が、「港」(空も港も夜ははれて)や、「ウミ」(ウミハヒロイナ大キイナ)「夕日」(ぎんぎんぎらぎら)、「夕焼小焼」で長浜湾に届けとばかりに親子五人大声で歌った。

今でも海沿いの道を運転する車窓から段々畑の丘陵地を見る度に孫たちと歌うのである。

入賞

「ラーメン」

山崎 俊行 (六十歳)

小学校のすぐ近くに、父母が営む店があった。メインストリートから少し離れた、砂利道にある小さなラーメン店だったが、僕はそのことが嫌だった。「ラーメン屋！」とからかわれたりしたからだ。

小学二年生の時、そのことを作文に書いた。「ぼくのうちはラーメン屋です。」との書き出しで気持ちを綴った。ところが、その作文が県のコンクールで賞をもらうことになり、家族の知るところになった。

その時の家族の反応は全く覚えてはいないが、後に父がそのことを痛く気に病んでいたらしいことを知った。

その店も三十年前に閉じることとなり、父も五年前に他界した。いつだったか知人から、「いつもラーメン食べてるね」と言われたことがある。

長く思い出すこともなかったが、今もラーメンが大好きだ。

